

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	0473100410		
法人名	社会福祉法人 涌谷町社会福祉協議会		
事業所名	グループホームゆうらいふ	ユニット名	あさひ
所在地	宮城県遠田郡涌谷町涌谷字新下町浦192		
自己評価作成日	平成24年11月16日		

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://yell.hello-net.info/kouhyou/
----------	---------------------------------------------------------------------------------------

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	NPO法人 介護の社会化を進める一万人市民委員会宮城県民の会		
所在地	宮城県仙台市宮城野区榴岡4-2-8 テルウェル仙台ビル2階		
訪問調査日	平成24年12月7日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

高齢者福祉複合施設という特性と地域性もあり、民生委員や行政区長をはじめ、一般客の出入りがとても多く、単独のグループホームよりもその点が大変恵まれている。それらの利点を多様に活用し日々のケアに取り入れる事を意識しながら、子供達を含むボランティアや学生の実習等も積極的に受け入れ、幅広い年齢層に親しまれるホームを目指している。また、他事業所との事業など、人との交流の場が多いことから、認知症の方が地域で暮らしていけるよう家族を含めて理解して頂けるよう努め、高齢者施設だからと内にもったり、閉鎖的になる事が決まらず常に意識しながら取り組みをしている。あくまでも出来ない事を問題にするのではなく、出来る可能性を最大限に生かしていく事を大切にして、入居者を中心として常に新しい取り組みを日々実践している。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

法人の理念「わたしたちは、あなたと伴にあなたの生活を大切にします」を受けて、グループホーム独自の目標をつくり、さらにそれを基にして個人目標を立てて毎月自己評価をしている。地域との交流も、ホーム独自の夏祭りへの招待や町が主催する敬老会等行事への参加が活発に行われている。災害対策として年2回の避難訓練を実施すると共に、防災倉庫を新設して非常食等の防災グッズを整備している。又、地域住民との間に「ゆうらいふ災害発生時近隣応援体制」を定めて連携を図っている。家族アンケートに、「本人の表情がとても良い」「いつ行っても職員は笑顔で迎えてくれる」とあるのも理解出来る。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない			

2自己評価および外部評価結果(詳細)(事業所名 **グループホーム ゆうらいふ**)「ユニット名 **あさひ** 」

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	法人理念を基本とした上で、それらが一人歩きしないよう、グループホーム部署目標・個人目標を掲げている。毎月、自己評価を行い、目標を振り返り今後に活かす機会を設けている。毎月の打ち合わせ時などにおいても理念を振り返り、常に資質向上に取り組むこととしている。	涌谷町社協が運営する、高齢者福祉複合施設の一つとして「グループホームゆうらいふ」がある。法人の理念を基に、毎年ホーム独自の理念をつくっている。職員はそれぞれ年間個人目標を決めて毎月自己評価をしている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	法人施設の研修室を開放して実施している各種会議の帰りなどに入居者の家族や知人が立ち寄ってくれたり、意識せずとも自然とつながりが深くなっている。また、近隣の保育所の夕涼み会や地域の文化祭などにも積極的に参加している。子供達の慰問や実習、ボランティア活動に來てくれるなど、交流は比較的多く行っている。	複合施設として一体的に行事を計画し、地域の皆さんにもお誘いのチラシを配布して交流を図っている。春は花見、夏は夏祭り、秋は敬老会、冬はクリスマス会が行われている。ホームのユニット毎の機関誌「ほほえみ」を年4回発行している。複合施設であることにより訪れる人も多く、ついでにホームに立ち寄る人もいる。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	法人として地域の勉強会や研修会等にも関わり、出前講座を行ったりしている。また、「認知症ケアについて」パネルディスカッションでは事業所での実践内容と経験を踏まえパネラーとして参加するなど、認知ケアの啓発活動に努めている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かす	運営推進会議において、活動状況の報告と共に、出席して頂いた方より感想やご意見、ご要望などを伺い、双方向的な会議になるよう配慮しながら、サービス向上につなげるようにしている。	平成23年度の開催は4回の予定であったが、実施記録が確認出来ない。24年度は、7月と9月の実施記録が確認出来た。しかし年間の計画予定が不明である。	運営推進会議の必要性を理解して、2か月に1回以上(年6回以上)の開催と年4回以上の市町村職員からの参加の定着を図って欲しい。
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	運営推進会議の他、入居判定会議などにおいて実情や取り組みを伝えている。また、各種会議や勉強会などにおいて担当者との関わりも多く、その際にもホームの状況報告を行なうなどして連携をとっている。	法人が一体的に計画する各種行事を通して交流が図られ、入居者の家族からの相談に対する助言を得たり、電話での相談も気軽に出来ている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	入居者本位に努め、鍵やベットの使用についても虐待につながるという認識を持つよう努め、ケアが短絡的にならないようにしている。	法人内各事業所の代表が参加する資質向上委員会があり、その企画の一つに「身体拘束に関する勉強会」がある。特に気をつけているのは、事象に対する対策だけでなく、原因を追究して対策を講じている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	職員間の中で、入居者の望まないケアは全て虐待にあたるという意識の統一を行っている。実質的な介護技術ケアはもちろんであるが、誘導方法や声掛け等の内面的なケアもひとつ間違えば虐待にあたるという意識を持ち取り組んでいる。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	認知症の進行や身寄りが無い等の事情がある方について、行政や各関係機関と連携し、成年後見人制度利用を勧めた経緯があり、職員間でも学ぶ良い機会となった。情報誌を回覧したり、現在も知識を得る努力をしている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	十分に時間をとり説明し、認知症ケアに対する考え方と取り組み、緊急時医療連携体制の実態と個人情報の取扱いなどについて十分に時間をとり説明し、同意を頂くようにしている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	特定の入居者の意見だけが反映されないよう機会を作り話題提供している。具体的には、入浴の時間など日常生活上の意思決定について本人の思いを優先するようにしたり、月に数日のメニューについては利用者の好みを聞き献立に取り入れ、入居者の満足度の向上に努めている。サービスの質の向上の為に家族の意見が必要不可欠であるとの視点を大切に、行事や訪問時等を含め家族に問いかけ、小さな意見でも言ってくれるような雰囲気作りに努めている。	入居者の要望は、1対1の場面で出る場合が多いので、色々な話し掛けをして聞き出すようにしている。その結果はケース記録に書き込み、ユニット会議や全体会議で対応を検討している。家族からの相談等は毎月の面会等の際に多く出されるが、その中でかかりつけ医への通院の際に入居者の情報が欲しいとの要望があり、入居者の日常のデータ等をまとめた報告書の写しを提供している。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	法人組織と年1回全職員の個別面談の機会を設けている他、毎月の打ち合わせ等でも職員の率直な意見を聞くよう心掛けている。	改善提案は、毎月の全体会議で提案され、体調管理のための酸素濃度測定器を購入している(体調不良の時は測定値が低く表示)。ユニットにまたがる中庭を整備してユニット間の交流を図る等の提案を検討中である。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	より高い能力水準へとスキルアップ出来る事を目的とし、人事考課制度の運営を開始しており、各職種グレード別に取り組みと考課を実践し、やりがいを持って働ける職場環境を目指している。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実態と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	職員の資質に応じて段階的に法人内外の研修に参加できる体制をとっている。また、登録職員も必要に応じて研修・会議には参加する機会を確保している。さらに、法人全体で資質向上の委員会の他にも各種委員会が組織化されており、年間の研修が計画・立案されている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	県内で多くのシェアを持つ協議会へ加入し、見学を含めた学習会や職員研修に参加している。他事業所の多角的な意見を取り入れ、経験を活かしながら質の向上を目指している。また、研修会へ参加した職員は必ず復命し、良い取り組み事例はすぐに現場へ還元するように努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	相談があった際には、必ず本人に会って心身の状態や表情から読み取れる思いを確認し、本人と向き合う事が信頼関係を構築する第一歩だと考え取り組んでいる。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	何に困り、何が必要なのかゆつくりと時間をかけて聞く事で、信頼関係を築けるように対応している。その上で本人と家族が望むケアについて確認し事業所としてどのような対応が出来るのかを理解して頂く様にしている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	相談時に本人及び家族の思いや状況を確認し、必要に応じて他のサービスの利用調整や提案を行うなど、可能な限り柔軟な対応を行うようにしている。法人内で運営している独自サービスを契約利用してもらいながら顧客満足度の向上に努めている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	サービスを提供する側、される側の短絡的な意識を持たないようにした上で、共に支えあいながら生活をしていくという考えを職員が共有し、一人一人が役割活動を通して、主役になれるような場面作りには留意している。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	介護の専門職としての助言を含め、押し付けにならない程度で入居者の思いを情報提供する事で、家族に余裕が生まれ本来の結びつきが強くなってきている、		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	生活環境が極力変化しないように努め、入居前からの近隣の方との人間関係や生活習慣等を尊重し支援している。また協力して頂く方々にも認知症を理解して頂く様に働きかけている。	入所契約時のアセスメントで把握し、入所後の介護計画に反映させている。入所前に一人暮らしの長かった人は、当時お世話になった民生委員と食事に出掛けたり、入所前の趣味の編み物を現在も続けている人もいる。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せず利用同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	役割活動を通して入居者の同士の支えあいを引き出し、職員が調整役になるように支援しながら注意深く見守るようにしている。皆で行なう各種レクや手先を使う作業を通して一体感が生まれるよう配慮している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	入院中も機会を得てお見舞いに行くなど関係性を大切にしている。退去後も折をみてご家族の話や相談事に乗れるよう、日ごろから信頼関係を築けるよう努めている		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	日々の暮らしの中で本人の意向を読み取ろうと関わるようにするのはもちろん、認知症により訴え・要望は日々変化している事を伝え、本人を主体として考え何が最良なのか家族を交え話あうようにしている。	行事に参加している時の様子や毎日の暮らしの中で見せるその人の意外な一面を大事にして、介護計画に反映させている。特に夏祭りの演芸大会での力強い手拍子等には本人の思いが込められていると感じる。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入居前の訪問調査時の聞き取りを始め、入居後も本人や家族の言葉に耳を傾けながら、言葉遣いやプライバシーを考慮しながら情報の把握に努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	入居前からの習慣を含め、個人個人の生活習慣を尊重しながら、できないことよりできることへ注目し残存能力を維持していけるような支援と現状の把握を心掛けている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	入居者本人について、職員全員で状態把握が出来るように努めモニタリングやカンファレンスを行ないながら、その人らしさを引き出す介護計画を念頭に置き、それらに本人・家族の要望を取り入れ反映できるようにしている。	カンファレンスシートに一人ひとりの一日の状況を書き込み、職員同士の話し合いを持ってモニタリングの基礎資料としている。ケアプラン作成のための課題検討用紙で原因を追究し、介護計画へ反映している。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	入居者の日常生活上での心身的な状態変化、気づきはもちろん、水分・食事量、排泄面など個別に必要な情報も、個別のケア記録に記入している。また、ケアカンファレンスを行ない、全入居者の状態を把握した上で全職員が確認できるようにして情報の共有を徹底している。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	医療連携体制を強化し日常的な健康管理を行い、本人及び家族の負担となる受診・入院の回避を行うよう努めている。また、定期的な通院や受診などの必要な支援もある程度柔軟に対応している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	入居者が住みなれた地域で安心して暮らしていけるように、地域の民生委員や行政区長、近隣の子供達、ボランティア等にも働きかけ協力を頂きながら支援している。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	事業所の協力病院の他、本人や家族が希望するかかりつけ医を基本的に家族対応で受診している。その際も、文書にて医師へ生活の様子の報告書を提出し、指示を頂きながら情報伝達を密にして信頼関係を築いている。	入居者には、協力医とかかりつけ医等複数受診の人もいる。職員による受診の場合は問題ないが、家族による受診の際は、入居者の日々の情報を報告書としてまとめ、医師への状況報告のために家族に提供している。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	同一法人内の看護師を配置し、日常的に入居者の健康管理や必要に応じた援助を行っている。介護職員とも気軽に相談できる体制が確保されている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院を含む環境の変化を最小限に抑えるべく、本人及び家族の意向を確認し医療機関や地域医療連携室とも情報交換しながら速やかな退院支援が出来るよう支援している。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	事業所として対応に係る指針を定め説明を行っている。また、対応が可能なケアについて検討し、職員間で援助方法の統一を図っている。家族との連携を密にとるように努め、家族と共に本人様の今後について検討を行い、ケアに反映させるようにしている。	重度化や終末期に向けたホームとしての可能な対応については、別途定めた「重度化した場合における対応に係る指針」により契約時に説明して家族の理解を得ている。尚、本人、家族の要望に応えられるようお願いしたい。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	消防署の協力を頂くなどして定期的に研修会を実施し救命救急法の技術向上に努めている。急変や事故発生時に応じてのマニュアルを作成している。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年に数回災害を想定した実践的な訓練を実施している。また、近隣の区長をはじめ、近隣の地域の方においてゆうらいふ災害時支援協力員が組織化されており、防災訓練などにも参加して頂いている。同一法人内で災害時、携帯電話への一斉通信や災害マニュアルがある。	訓練は6月と11月(夜間想定)の2回実施している。震災後、防災倉庫を整備し非常食等の体制を整えている。緊急時の情報連絡体制に地域住民の支援を組み込み「ゆうらいふ災害発生時近隣応援体制」を定めている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	入居者ひとりひとりの誇りやプライバシーに配慮しつつ、声掛けや援助について日常的に確認するように取り組んでいる。情報の個性や守秘義務をスタッフ間にて十分に理解し、書類等を取り扱っている。	プライバシーの保護と守秘義務に関する研修をホーム勤務が始めての職員を対称に行っている。入居者同士で呼び合っているあだ名で職員が声を掛けることはしないことで意識合わせをしている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	感情の意思表示が困難な入居者に対しても時間を多くして関わる事や、複数の選択肢を設けて入居者が自由に選ぶ事ができる環境と共に選びやすく、答え易い声掛け等配慮している。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	その日の入居者の体調、ペースなどを尊重しそれぞれが自己決定した上で主役になれる場面づくりを心掛け柔軟に対応している。体調に合わせ食事時間や入浴の時間にも考慮している。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	まず楽しんで頂く事を前提として、本人の好みを尊重し職員はその出来ない所を必要な時に手伝い支援するようにしている。理美容についても本人のこだわりを大切にしつつ支援している。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	ホームで作った野菜と一緒に採り調理したり、嚥下面で食べられない食材を食べられる様工夫したり視覚的にも満足して頂ける様配慮している。献立と一緒に相談し考える他、リクエストメニューを導入し楽しんで食べて頂く事に重点を置いている。スタッフと入居者が同じテーブルを囲み楽しく食事できるよう雰囲気づくりにも配慮して	月に1回は法人の厨房と提携して行事食としている。又、年何回かは特養や通所と合同でバイキング料理を計画し、その中で井祭りコーナーをつくり5～6種類の井が提供されている。食後の後片付けには、率先して生き生きと取り組んでいる笑顔が見られる。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	個々の食事・水分量を記録につけ、職員間で情報を共有している。毎月のメニューも定期的に管理栄養士に確認して頂き専門的な見地からアドバイスをもらっている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後の歯磨きの声掛けを行い、困難な方には本人が持っている残存能力を活用しながら支援を行っている。また、法人で歯科医院と契約し定期健診を実施するなどして口腔内の生活保持に向けて取り組んでいる。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	個々の排泄パターンを把握し、随時誘導しながら本人のシグナルを見落とさないように心掛けて支援している。また、皮膚トラブルも考慮しオムツを使用している方について、出来る限り外しながらパンツへと移行できるよう援助している。	その人にあったトイレ誘導により、日中は布パンツの人も多い。夜は22時から2時間毎に翌朝4時まで見廻っている。その時に特段の異常が感じられない時は、安眠の妨げとならない様に必要以上の声掛けはしていない。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	毎日乳製品や繊維質の多い食材を取り入れたり、体を動かす機会を適度に設ける等便秘予防に取り組み、自然排便ができる環境を目指している。職員間ではすぐに薬を使用したりする等短絡的な方法をとらない様意識統一を図り、本人のサインを注意深く見守っている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	入浴を拒む方に対して十分に時間をかけ関わったり、チームプレイで対応するなどし、入居者の希望を優先しながら安全な入浴支援を実施している。ADLが重度化しつつある入居者様に対しても、体調を考慮した上で、2人介助での入浴対応を実施し安全面に配慮している。入浴剤の使用等楽しめる工夫も行っている	毎日入浴を希望する人はいないが、週2~3回の入浴となっている。また、夕食後を希望する人もいない。入浴を楽しむための複数の入浴剤を準備し、好きなものを選んでもらっている。入浴が困難な場合には、二人介助で対応し安心して湯船に入って貰っている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	日中の活動になるべく幅を持たせて生活リズムを整えた上で、夕方からは穏やかな時間を過ごし安眠が出来るように促している。寝付けない方には一緒に話をしたり、飲み物を提供するなどゆったりとした時間提供にも配慮している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	処方箋を個々のケース記録に整理し、内容や副作用について職員が把握できる様にしている。追加薬があった時や不明な点は必ず看護師と相談する等して本人の状態変化にあわせた対応が出来る様連携を強めている。ケース記録と共に送りノートを活用し、徹底した周知を行っている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	季節に応じた仕事や年間の行事を通じ、それぞれの入居者様に得意分野での経験や知識を活かし活躍する場面を多く設ける様コミュニケーションを図りながら実践している。それらを終えた際には必ず感謝の言葉を伝え反応を確認し今後に活かすようにしている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	一人一人の要望に応じて外気に触れ気分転換を図る意味で、買い物やドライブなどの個別外出を実施している。時に大勢での外出も良い刺激となり得る為、その時々状況に応じて出掛けている。	年間の計画的な外出は、花見から始まって松島見学、町民文化祭、敬老会等となっている。入居者がその気になった時は極力応えることとして、食材の買出しの度に声掛けして、希望する人と一緒の場合も多い。また、自分の欲しい物をついでに買う人もいる。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	入居者の中には、家族の理解のもと小額ではあるがお金を所持している方もいる。社会生活とお金のつながりの中において、過去の記憶を呼び覚ます効果もある為、良い刺激の提供という意味においてトラブルにつながらないよう気をつけながら見守りしている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	本人の意向を尊重しつつ代筆や電話の交換を行い随時支援している。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	一人一人が居心地よく過ごせるように季節に応じた飾り付けを入居者と共に作成している。視覚をはじめ五感などの感覚的にも適度な刺激と生活感を組み込みながら日常的に暮らしの場を整えている。	町内のボランティアグループ「折り紙の会」が隣接している社会福祉協議会の研修室で活動しており、季節に応じた作品がホームに飾られている。夏祭りには、各事業部の作品展が開催され、入居者と職員の合同作品「絵灯籠」がゆうらいふ大賞を受賞し壁を飾っている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	ホームの中にある程度死角になるちょっとしたスペースを設け、独りになることでほっとするような居心地の良い居場所を確保している。その際に職員が必要以上に介入しすぎないように気をつけ、入居者のストレスの緩和に配慮している		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	移り住みなど環境の変化による不安や影響を最小限に抑えるため、入居時は特に馴染みの物を持参して頂くように本人や家族に働きかけている。家具の配置にも気を配り住み慣れた自宅の部屋の縮図に近づくように心掛けている。	居室は、やや広めのゆったりとした感じで、それぞれに思い出の品々で飾られている。入り口には、クリスマスリースが飾られ、全室エアコン、空気清浄機が取り付けられて温度管理も良好で快適な環境となっている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	できない事を見極め、対象の入居者について職員間で何度も検討し、可能な限り出来る状態に引き戻せるよう取り組んでいる。本人の混乱や失敗を考慮しつつ、まずやってみる気持ちを大切にしている。		

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	0473100410		
法人名	社会福祉法人 涌谷町社会福祉協議会		
事業所名	グループホームゆうらいふ	ユニット名	ゆうひ
所在地	宮城県遠田郡涌谷町涌谷字新下町浦192		
自己評価作成日	平成23年8月22日		

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://yell.hello-net.info/kouhyou/
----------	---------------------------------------------------------------------------------------

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	NPO法人 介護の社会化を進める一万人市民委員会宮城県民の会		
所在地	宮城県仙台市宮城野区榴岡4-2-8 テルウェル仙台ビル2階		
訪問調査日	平成24年12月7日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

高齢者福祉複合施設という特性と地域性もあり、民生委員や行政区長をはじめ、一般客の出入りがとても多く、単独のグループホームよりもその点が大変恵まれている。それらの利点を多様に活用し日々のケアに取り入れる事を意識しながら、子供達を含むボランティアや学生の実習等も積極的に受け入れ、幅広い年齢層に親しまれるホームを目指している。また、他事業所との事業など、人との交流の場が多いことから、認知症の方が地域で暮らしていけるよう家族を含めて理解して頂けるよう努め、高齢者施設だからと内にもったり、閉鎖的になる事が決まらず常に意識しながら取り組みをしている。あくまでも出来ない事を問題にするのではなく、出来る可能性を最大限に生かしていく事を大切にして、入居者を中心として常に新しい取り組みを日々実践している。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

法人の理念「わたしたちは、あなたと伴にあなたの生活を大切にします」を受けて、グループホーム独自の目標をつくり、さらにそれを基にして個人目標を立てて毎月自己評価をしている。地域との交流も、ホーム独自の夏祭りへの招待や町が主催する敬老会等行事への参加が活発に行われている。災害対策として年2回の避難訓練を実施すると共に、防災倉庫を新設して非常食等の防災グッズを整備している。又、地域住民との間に「ゆうらいふ災害発生時近隣応援体制」を定めて連携を図っている。家族アンケートに、「本人の表情がとても良い」「いつ行っても職員は笑顔で迎えてくれる」とあるのも理解出来る。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない			

2 自己評価および外部評価結果(詳細)(事業所名 **グループホーム ゆうらいふ**)「ユニット名 **ゆうひ** 」

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	法人理念を基本とし、グループホーム部署目標・個人目標を掲げている。定期的に自己評価を行い、目標を振り返るとともに、毎月の打ち合わせ時などにおいても理念を振り返り、常にケアの向上に取り組んでいる	涌谷町社協が運営する、高齢者福祉複合施設の一つとして「グループホームゆうらいふ」がある。法人の理念を基に、毎年ホーム独自の理念をつくっている。職員はそれぞれ年間個人目標を決めて毎月自己評価をしている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	入居者の家族や知人が訪問してくれたり、一緒にで外出・外食されたり、行事など外出先でも親しく声をかけてくれたり自然とつながりができている。また、近隣の保育所の行事や町の文化祭にも積極的に参加している。子供たちの慰問や実習、ボランティア活動等で交流は行われている。	複合施設として一体的に行事を計画し、地域の皆さんにもお誘いのチラシを配布して交流を図っている。春は花見、夏は夏祭り、秋は敬老会、冬はクリスマス会が行われている。ホームのユニット毎の機関誌「ほほえみ」を年4回発行している。複合施設であることにより訪れる人も多く、ついでにホームに立ち寄る人もい	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	法人として地域の勉強会や研修会に関わり、出前講座を行なっている。「認知症ケアについて」パネルディスカッションでは事業所での実践内容と経験を踏まえパネラーとして参加するなど、認知症ケアについての啓発活動に努めている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	運営推進会議において、活動状況を報告したり、出席して頂いた方より様々な感想やご意見などを伺いながら、サービスの質の向上を目指している。	平成23年度の開催は4回の予定であったが、実施記録が確認出来ない。24年度は、7月と9月の実施記録が確認出来た。しかし年間の計画予定が不明である。	運営推進会議の必要性を理解して、2カ月に1回以上(年6回以上)の開催と年4回以上の市町村職員からの参加の定着を図って欲しい。
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	運営推進会議の他、入居判定会議等において実情や取り組みを伝えている。また、各種会議や勉強会においての関わりも多く、その際にもホームの状況報告を行なうなど連携をとっている。	法人が一体的に計画する各種行事を通して交流が図られ、入居者の家族からの相談に対する助言を得たり、電話での相談も気軽に出来ている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	常に入居者の立場から考え、鍵やベッド柵の使用についても虐待につながるという認識を持つよう努め、ケアが短絡的にならないようにしている。	法人内各事業所の代表が参加する資質向上委員会があり、その企画の一つに「身体拘束に関する勉強会」がある。特に気をつけているのは、事象に対する対策だけでなく、原因を追究して対策を講じている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないよう注意を払い、防止に努めている	上記同様、常に入居者の立場からケアを行うことにしており、実質的な介護技術ケアはもちろんであるが、誘導方法や声がけ等の内面的なケアもひとつ間違えば虐待にあたると意識を持ち取り組んでいる。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	認知症の進行や身寄りがないなどの事情がある方について、行政や関係機関と連携し、成年後見人制度利用を進めた経緯があり職員間でも学ぶ良い機会となった。情報誌を回覧したり、現在も知識を得る努力をしている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	内容を省くことなく、認知症ケアに対する考え方と取組、緊急時医療連携体制の実際と個人情報の取り扱いについて説明し、理解を得たうえで同意をいただくことにしている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	入居者が遠慮なく自分の意見や希望を伝えられるような雰囲気づくりに努めている。担当者が中心になりそれぞれの好みや思いに気づき、それらを実践できるよう努力している。ケアの質の向上には家族の意見が必要不可欠であるとの視点を大切に、行事や訪問時に問いかけ小さな意見でも話して頂ける様な雰囲気づくりに努めている	入居者の要望は、1対1の場面で出る場合が多いので、色々な話し掛けをして聞き出すようにしている。その結果はケース記録に書き込み、ユニット会議や全体会議で対応を検討している。家族からの相談等は毎月の面会等の際に多く出されるが、その中でかかりつけ医への通院の際に入居者の情報が欲しいとの要望があり、入居者の日常のデータ等をまとめた報告書の写しを提供している。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	カンファレンスや月に一度の全体会議にて職員に意見や提案を聞くようにしより良いケアにつなげていくようにしている	改善提案は、毎月の全体会議で提案され、体調管理のための酸素濃度測定器を購入している(体調不良の時は測定値が低く表示)。ユニットにまたがる中庭を整備してユニット間の交流を図る等の提案を検討中である。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	人事考課制度を開始し、全職員のスキルアップを目指している。各職種グレード別に取り組みと考課を実践し、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	外部の研修・講習等に職員が各自のスキルに合わせ参加できるような体制ととっている。また、法人にて資質向上委員会の他、各種委員会にて、年間の研修が計画・立案されている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	県内で多くのシェアを持つ協議会に加入しており、見学を含めた学習会や職員研修に参加している。他事業所の意見や経験を聞く貴重な時間であり、良い取組事例を現場に還元するように各自職員に周知している		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	最初の面談の時点から、本人の思いを察知し、聞き出せるよう努めている。本人と向き合い、信頼関係を築けるよう取り組んでいる。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	面談時間を十分にとり、不安や要望を聞き受け止めることで信頼関係を築けるように努力している。さらに本人と家族が望むケアに対し、事業所としてどのような対応ができるか理解していただけるようにしている		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	相談時間に時間をかけ、本人と家族の思いを確認し見極め、他のサービスの利用調整や提案を行うなど その時に合わせた対応に努めている。また、法人内の独自のサービスを契約利用してもらいながら顧客満足度の向上を目指している		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	介護をする側・される側といった一方的な見方をせず、ともに支えあい、生活共同者として意識づけを職員間で共有するよう努めている		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	専門職として一方的に意見を押し付けず、本人・家族の思いを聞き受け止めることでともに支えていくという信頼関係を築けるように心がけている		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	入居前と環境が極力変化しないように努め、本人の趣味・習慣等を継続できる環境を作っている。また協力していただく方々にも認知症を理解していただけるように働きかけている	入所契約時のアセスメントで把握し、入所後の介護計画に反映させている。入所前に一人暮らしの長かった人は、当時お世話になった民生委員と食事に出掛けたり、入所前の趣味の編み物を現在も続けている人もいる。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せず利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	共通の趣味や役割活動を通じて、入居者同士が関わりを持てるよう職員が調整役となっている。また毎日のレクリエーションや行事等で一体感を感じられるよう努めている		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	入院中も機会を得てお見舞いに行くなど関係性を大切にしている。退去後も折をみてご家族の話や相談事に乗れるよう、日ごろから信頼関係を築けるよう努めている		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	本人の希望・意向をくみ取れるよう、日々の関わりを持っている。認知症により訴え・要望が変化されていることを家族に伝え、本人を主体としたケアを提供できるよう話し合いを持っている。	行事に参加している時の様子や毎日の暮らしの中で見せるその人の意外な一面を大事にして、介護計画に反映させている。特に夏祭りの演芸大会での力強い手拍子等には本人の思いが込められていると感じる。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入居前の面談時にじっくりと話を聞く機会を持ち、なおかつ入居後も本人・家族とのかかわりを深め情報の把握に努めている		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	入居前からの生活習慣を継続できるよう(起床後の掃除等)、各々の暮らし方を尊重し、できないことよりできることへ注目し、残存能力を維持できるよう支援を心がけている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	カンファレンスやモニタリングで全職員が入居者の状態を把握できるよう努めている。本人主体の介護計画を念頭に置き、それらに本人・家族の要望を取り入れ反映できるようにしている	カンファレンスシートに一人ひとりの一日の状況を書き込み、職員同士の話し合いを持ってモニタリングの基礎資料としている。ケアプラン作成のための課題検討用紙で原因を追究し、介護計画へ反映している。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	日々の様子を時間ごとに詳しく記入し、心身の状態変化・気づき・水分・食事量・排泄面を個別の記録に記入している。また、カンファレンスや引き継ぎノートにて入居者の状態把握を確認できるよう徹底している		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	定期受診の際 提出する報告書以外にも必要に応じ職員が同行するなど柔軟な対応をしている。できるだけ本人や家族の要望に応えられるよう情報を収集し、サービスの多機能化に努めている		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	住み慣れた地域で安全で豊かな暮らしを楽しめるよう、地域の民生委員や行政区長、学校関連・ボランティアに働きかけ協力をいただきながら支援している		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	事業所の協力病院のほか、本人や家族が希望するかかりつけ医を基本的に家族対応で受診している。その際も生活様子の報告を提出し、情報伝達を密にすることにより適切な医療が行われるようサポートしている。	入居者には、協力医とかかりつけ医等複数受診の人もいる。職員による受診の場合は問題ないが、家族による受診の際は、入居者の日々の情報を報告書としてまとめ、医師への状況報告のために家族に提供している。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	同一法人内の看護師を配置し、日常的に入居者の健康管理や必要に応じた援助を行っている。介護職員とも情報交換ができる密な関係を維持している		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院を含む環境の変化を最小限に抑えるべく、本人および家族の意向を確認し医療機関とも情報交換しながらできるだけ早期に退院できるよう支援している		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所のできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域との関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	事業所として対応に係る指針を定め説明を行っている。対応が可能なケアについて検討し、職員間で援助方法の統一を図っている。家族との連携を密にとるよう努め、共に今後について検討し、ケアに反映させるようにしている。	重度化や終末期に向けたホームとしての可能な対応については、別途定めた「重度化した場合における対応に係る指針」により契約時に説明して家族の理解を得ている。尚、本人、家族の要望に応えられるようお願いしたい。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	消防署の協力を頂くなどして研修会を実施し、救急救命法の技術向上に努めている。急変や事故発生時に応じてのマニュアルを作成している。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年に数回災害を想定した実践的な訓練を実施している。近隣区長や地域の方においてゆうらいふ災害時支援協力員が組織化されており、訓練にも参加して頂いている。同一法人内で災害時、携帯電話への一斉通信や災害マニュアルがある。	訓練は6月と11月(夜間想定)の2回実施している。震災後、防災倉庫を整備し非常食等の体制を整えている。緊急時の情報連絡体制に地域住民の支援を組み込み「ゆうらいふ災害発生時近隣応援体制」を定めている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	入居者それぞれの個性や性質を把握したうえで関わりを持っている。人生の先輩として敬うことを第一条件として職員間に周知している	プライバシーの保護と守秘義務に関する研修をホーム勤務が始めての職員を対称に行っている。入居者同士で呼び合っているあだ名で職員が声を掛けることはしないことで意識合わせをしている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	思いや希望を上手く言い表せない方に対しても日ごろの関わりから表情や行動で察知できるように努めている。また複数の選択肢を設け入居者が自由に選ぶことができる環境も目指している		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	入居者それぞれの一日の生活リズムを把握し、長年の習慣を継続できるように努めている。体調に合わせて食事時間や入浴の時間にも配慮している		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	職員の押し付けではなく、各入居者の個性やこだわりを尊重している。毎朝の服装も本人と一緒に選ぶようし、おしゃれすることの楽しさを感じていただけるよう支援している		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	各入居者が役割を持ち、準備・配膳・片づけを手伝って頂いている。畑で採れた野菜を調理し季節の食材を味わって頂いている。また、リクエストメニューにて献立を選ぶ楽しさを感じて頂けるよう配慮している。	月に1回は法人の厨房と提携して行事食としている。又、年何回かは特養や通所と合同でバイキング料理を計画し、その中で井祭りコーナーをつくり5～6種類の丼が提供されている。食後の後片付けには、率先して生き生きと取り組んでいる笑顔が見られる。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	個々の食事・水分量を記録につけ把握し、さらに排泄量や体重の変動にも気を配っている。毎月のメニューも定期的に管理栄養士に確認してもらい専門的な見地からアドバイスをもらっている		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後の歯磨きの声掛けを行い清潔を保持している。自力で難しい方には残存能力を活用しながらの支援をしている。また法人で歯科医院と契約し定期健診を実施している		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	各入居者の排泄のパターン・習慣を全職員で把握し その上で誘導の声掛けを行っている。本人のサインを見逃さないことにより、オムツからパット、パットから布パンツへ移行できるよう支援している	その人にあったトイレ誘導により、日中は布パンツの人も多い。夜は22時から2時間毎に翌朝4時まで見廻っている。その時に特段の異常が感じられない時は、安眠の妨げとならない様に必要以上の声掛けはしていない。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	朝食後の乳製品の提供、通常の献立(おやつ含む)にも繊維質の多い食材を取り入れている。レクリエーション時に体を動かす機会を取り入れ、できるだけ自然排便できるように努めている		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	入居前からの習慣を大切に、入居者の希望の時間に添えるようにしている。入浴を拒む方にも時間を置いたり、職員を交代して声掛け行うなどし、気持ちよく入っていただけるよう努めている	毎日入浴を希望する人はいないが、週2~3回の入浴となっている。また、夕食後希望する人もいない。入浴を楽しむための複数の入浴剤を準備し、好きなものを選んでもらっている。入浴が困難な場合には、二人介助で対応し安心して湯船に入って貰っている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	一人一人の生活習慣に合わせてながら日中のリズムを作り上げ、できるだけ本人の希望に沿った就寝時間の確保につとめている。寝付けない方には一緒に話をしたり飲み物を提供するなどゆったりとした時間提供にも配慮している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	処方箋を個々のケース記録に整理し、内容や副作用について全職員が把握できるようにしている。薬提供時は確認を十分に行ない、追加薬や変更があった場合はケース記録と共に送りノートを活用し周知している。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	季節ごとの行事や日々の役割活動の中で一人ひとりが知識や生活歴を生かせるような機会を設けている。個々の好みや得意なことを気づき、引き出せるようにコミュニケーションを図っている		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	一人一人の希望に沿い 個別外出やユニット全体での外出を企画立案している。町内の行事に積極的に参加し、地域の人々との交流を楽しんでいただいている。	年間の計画的な外出は、花見から始まって松島見学、町民文化祭、敬老会等となっている。入居者がその気になった時は極力応えることとして、食材の買出しの度に声掛けして、希望する人と一緒の場合も多い。また、自分の欲しい物をついでに買う人もいる。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	お小遣いとして普段は職員が管理しているが、外出時には本人の小遣いとし所持していただき使えるよう支援している。中には家族了解のうえ、少額であるが普段から所持している方もおり、社会とのつながりを断ち切らないよう努めている		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	本人の希望を取り入れ、手紙や電話のやり取り(時には代筆も含め)をできるように支援している		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	居心地よく過ごせるよう季節ごとに装飾を変え、作成も入居者とともにやっている。何が快・不快なのかを探りだし、混乱を招くような刺激がないように努めている	町内のボランティアグループ「折り紙の会」が隣接している社会福祉協議会の研修室で活動しており、季節に応じた作品がホームに飾られている。夏祭りには、各事業部の作品展が開催され、入居者と職員の合同作品「絵灯籠」がゆうらいふ大賞を受賞し壁を飾っている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	ホーム内にソファをいくつか設置し、独りで落ち着ける場所を提供している。また冬であれば和室に炬燵を置いて 気の合った入居者同士が交流を楽しめるよう環境を整えている		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	入居時には馴染みの家具や小物類を持参していただき、環境の変化による不安や影響を最小限に抑えている。家具配置にも気を配り、住み慣れた自宅の部屋に近づけるよう配慮している	居室は、やや広めのゆったりとした感じで、それぞれに思い出の品々で飾られている。入り口には、クリスマスリースが飾られ、全室エアコン、空気清浄機が取り付けられて温度管理も良好で快適な環境となっている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	一人ひとりのできること・わかることを全職員で把握・共有することにより、可能な限り、安全で自立して生活が送れるよう支援している		